

善の曖昧さ —「精神の戦争」におけるドイツ人の教授たち—

ウルリッヒ・ジーク*

翻訳：石原 悠子

第一次世界大戦に対するドイツ人研究者らの態度はしばしば批判の対象とされてきた。とりわけ大学教授らが国家を戦時体制に仕立て、外国人嫌いの偏見を伝達するために果たした役割については多くの歴史学者が強調するところである。例えば、ボーフムで教鞭をとっていた哲学者であり歴史学者でもあるクルト・フラッシュは、過激な国家主義や反西洋の憤りが当時ドイツ人教授たちの間で見受けられたと報告している⁽¹⁾。しかしながらこのような見解はやや大雑把すぎる見方であり、プロパガンダ戦争の国際的な側面を度外視しているだけでなく、プロパガンディストらの自己理解を誤認するものでもある。さらに、一時期広く一般的であった「ドイツ的なものの形而上学（Deutschtumsmetaphysik）」への偏った非難はただ現代の偏見を硬直させてしまうか、あるいは逆の前提のもとでそれらの偏見を永続化させてしまうだけだろう⁽²⁾。

本稿は「精神の戦争（Krieg der Geister）」について確立されている見解の妥当性を問い、理念史におけるこれらの現象を分析するという広範にわたる文脈的アプローチを用いる。戦時中研究者らは細かく計算された議論というよりもスローガンや仰々しい様式にたよっていたために、このようなアプローチはいっそう好ましいと考えられる⁽³⁾。またそうした状況を受け、われわれ歴史学者らは、あたかもそれ自体は単刀直入な解釈を積極的に拒むようなテキスト群に対する解釈学を考案しなければならないという厳しい立場に立たされている。だがそうであるからこそ、受容史を明らかにすることがいっそう重要なのである。なお、問題の世界戦争文献の実際の影響を（少なくとも現実的に実現可能な程度まで）評価するためには、印刷部数、検閲および配分地区について詳しい知識を得る必要がある⁽⁴⁾。

ここでは国家主義的な縮図とみられる三つのテキストを扱いたい。一つ目はエルンスト・リサウアーの「英国に対する憎悪の讃歌（Hassgesang gegen England）」である。一見しただけではその攻撃的なレトリックと広範な影響は否定できないものである（I）。二つ目には「九十三人のマニフェスト」を分析したい。「九十三人のマニフェスト」は著名な科学者や作家らが署名し、国際的な共感を得る目的で作られたものの、直ちにドイツの自らに対する過大評価を表すものとして受け取られた（II）。三つ目にはヴェルナー・ゾンバルトのパンフレット、「商人と英雄（Händler und Helden）」を考察する。これはドイツ人教授陣に関わる戦争文献に対する今日における見解を形成したテキストとしてもっとも影響力のあったものである（III）。最後に「精神の戦争」に対するはっきりとした見解を打ち出す上で支払うべき代償がどのようなものであるのかを問い、その克服の方法について概観する（IV）。

I

「英国に対する憎悪の讃歌（Hassgesang gegen England）」の作者であるエルンスト・リサウアーはドイツ系同化ユダヤ人の一人であった。1910年に亡くなった父のヒューゴ・リサウアーはベルリンの裕福な絹商人であり、多くの人から慕われ「商業顧問官（Kommerzienrat）」という誇らしいタイトルを保持していた。多くの同世代の人がそうであったように、1882年生まれのエリク・リサウアーもまた父の財産を自分の知的関心のために利用し、有名な作詞家となった。だがまわりとは対照的に非常に保守的な世界観を持ち、ドイツ文化の保存を繁栄な未来のための必須条件とみていた。さらに、1912年にあった大規模なユダヤ人ディベートの際には、「道は二つだ

け開かれている。一つは移住という道、もう一つはドイツ人になるという道。だが後者の道をとるのであれば、掘り下げなさい。すべての力、あらゆる方法を使って根付きなさい。ドイツ人になるために自分を教育し、ドイツの主張を自身の主張としなさい」⁽⁵⁾と強く主張した。このことからすぐに予測できることだが、1914年の8月、リサウアーは妬ましい敵に囲まれながら（と彼の眼にはうつっていた）、自らをドイツ国家に捧げたのであった。彼は1914年の英国の連合国側への参入を許されざる裏切り行為とみなし、またドイツが掲げる最高位の文化的価値観に対する攻撃とみなした。

1914年9月、やや奇妙な仕方では出版された直後に「英国に対する憎悪の讃歌」は大衆の関心を大いに引いた。その冗漫な詩は戦争勃発時における英国の不信な行いに対するドイツの憤りを忠実に表現したものとして受け取られた。そのイデオロギー的なメッセージの大いなる重要性和その詩としての平凡さは 次のもっとも有名な箇所から理解されるだろう。

我々は憎しみを決して抑えることはないだろう
我々はたった一つの憎しみを持つだけである
我々は一丸となって愛し、一丸となって憎む。
我々の敵は一つであり、たった一つだけである、英国よ。⁽⁶⁾

この詩は当時のドイツにおいて広く受け入れられていた態度をそのままあらわしたものであった。シュテファン・ツヴァイクは『昨日の世界（Die Welt von Gestern）』の中で「憎悪の讃歌」を「弾丸倉庫に落ちた爆弾」と評してさえいる⁽⁷⁾。それは多少言い過ぎだとしても、リサウアーの詩がすぐに多大な支持を受けたことは疑い得ない事実である。

「憎悪の讃歌」は皇帝にも称賛され、国内戦線の雰囲気を作り上げた。戦争勃発後の数ヶ月は街中のいたるところで「英国に神の裁きあれ!」「そうであれ!」という掛け声が聞こえたほどであった。作者がベルリン出身の同化ユダヤ人だということが明るみになってからもとくに変化はなかった。皇帝からリボン付きの赤鷲勲章が授与され、バイエルン王太子とともに皇帝は軍部における詩の普及を保証した⁽⁸⁾。ユダヤ人であるリサウアーに対する汎ゲルマン主義者らによる罵倒は影響力を持たなかったのである。にもかかわらず、「憎悪の讃歌」は永続的な効果を持ち得なかった。そうした背景にはドイツのアカデミックな中流階級の教養市民層（Bildungsbürgertum）の影響があった。教養市民層の考え方や態度はおおむね世論を形成していたのだが、彼らは中央同盟国が人類の理想のために戦争をすすめていると固く信じ、そのため敵を悪魔化することに原則的に反対していたのである。影響力のあるユダヤ人知識人はさらに一歩先を行き、たとえば六十人のドイツ系ユダヤ人の世論指導者をインタビューしたビンジャミン・シーゲルによれば、「憎悪の讃歌」を真に「ユダヤ的」とみなしたのはそのうちたった一人だけであった⁽⁹⁾。大敵なる英国の中傷よりも普遍的な倫理的価値の方が重要であるというのが共通の見解だったのである。

戦争が続く中、その愛国的な詩が「騎士道的なドイツ文化」を否定するものであるという理由でリサウアーは次第に望まれない人と化していった。こうした評価は驚くほど一面的なものであったが、それによってリサウアーは結果的に追放され、また反ユダヤ主義者たちにとって都合な結果をもたらしたのであった。同時にリサウアーに対するそのような評価は、説明が必要とされていた連合国のドイツに対する破滅的なイメージの身代わりにもなっていた。また、彼のような急進的な国家主義的政治思想は当時リベラルなドイツ系ユダヤ人の間ではめずらしかったため、リサウアーは反ユダヤ人主義による中傷合戦の標的ともなった。多くの教養ある中流階級の人々は、学校や大学での教えの影響でドイツ文化に対する理想的な理解を好んでいた。ドイツの教養市民層がどれほど自分たちのことを高く評価していたかは1914年10月4日に出版された「文化的世界への懇願」から見て取ることができる。九十三ある署名のすべては著名な知識人によるもので、それは「ドイツ理念」の推進を求めるものであった。

ルターのテーゼを彷彿させる文体を意識的に用いた「九十三人のマニフェスト」も同様のプロパガンダに直面した。ヴィルヘルム二世はかのアッティラ大王とは反対に平和の王子であり、その公平さは二十六年の統治期間において何度も証明されてきた。ベルギーで戦争犯罪を犯したという非難は——ドイツ国家の生存権を確保するために中立性は犠牲にしなければならなかったため——、不当である。さらに「ドイツ軍国主義」は——それなしには「ドイツ文明はとっくに絶滅していたであろう」ため——、名誉ある称号であった。それとは対比的に英国やフランスの欺瞞的な性格は、ロシアやセルビアといった不正な国家と同盟を結んでいたことや、先住民に自分たちの居留地を「白色人種に対して」確保するように煽動していたことから明確に見て取ることができた⁽¹⁰⁾。

マニフェストの過激な口調ゆえに、歴史学者たちは長い間その政治責任を非難してきた。フリッツ・フィッシャーはウルリッヒ・フォン・ヴィラモーヴィッツ＝メレンドルフをその著者であり、プロイセンの貴族でもあり、また保守的な古代ギリシア学者であると見なした。しかしながら実際には、その世界的に有名なベルリンの教授はただマニフェストに署名しただけだったのである⁽¹¹⁾。マニフェストの原点は世紀の変わり目に皇帝の後進的な文化政策に強く反対したりベラル左派に求めることができる。ベルリンのゲーテ連盟（Goethebund）の会長であったルートヴィッヒ・フルダが第一草稿を書き、国家主義的な作家であるヘルマン・ブーダーマンが多くの重要な議論を提供した。ドイツですでに何十年も活躍していた画家マックス・リーバーマンや作家のゲアハルト・ハウプトマンもマニフェストに署名し、さらにいっそう驚くべきはドイツ学者たちの間での反響であった。

人文科学の分野でも広く尊敬されていた多くの教授陣が署名していた⁽¹²⁾。有名な神学者でありカイザー・ウィルヘルム協会の会長でもあったアドルフ・フォン・ハルナックのほか、哲学者ルドルフ・オイケン、ヴィルヘルム・ヴィンデルバント、マックス・ヴント、また経済学者のルヨ・ブレンターノやグスタフ・シュモラーらも署名した著名人の中に含まれていた。また科学者たちでさえも抑制されていなかった。マールブルクの教授であり1901年第一回ノーベル医学賞の受賞者であるエミール・フォン・ベーリングのほか、パウル・エールリヒ、フリッツ・ハーバー、エミール・フィッシャーやコンラート・レントゲンなどの世界的に有名な学者らも署名を捧げた。彼らは皆ノーベル賞を受賞していた。フリッツ・ハーバーも、連合国から毒ガスの使用の責任者として非難されていたものの、ついに1918年には受賞した⁽¹³⁾。

アルバート・アインシュタインのような平和主義的な考えはアカデミック界においてはあまり一般的でなかった。むしろ緊急時には母国を守ることが万人の義務であるという考えが流布していた⁽¹⁴⁾。「九十三人のマニフェスト」に署名した多くの教授陣は政治的に保守的であったわけではなく、一般的にリベラル左派や国民自由党に対して同情的であった。国のために立ち向かう彼らの意思は強いものであったが、成功するプロパガンダの背景については少しも考えようとしなかったのである。

すぐにマニフェストは十カ国語に翻訳されたが、当時のドイツ軍事機構のもとではその影響は破壊的であった。同盟国や中立国の観点からすれば、ドイツ軍がベルギーで犯した残虐行為について前線から遠く離れた学者たちが知る由もなかったのである。マニフェストの口調は思い上がった態度とみなされ、とりわけ当時の出来事を正当化するために作者らが引用した「ゲーテ、ベートーベン、カントの遺産」という文句がそういった態度をあらわしているとされた⁽¹⁵⁾。このような政治的関心に基づいた哲学的装飾に対する批判は当時でも妥当性を持ち、今日においてもいまだ妥当する。しかしながら、歴史的な状況についての十分な解釈抜きにしては、このような批判は網の目のような出来事の系列の重要な側面を覆い隠しかねない。

同盟国によるプロパガンダのその攻撃的な性格と同時にそのプロフェッショナリズムはいずれも学者たちのドイツ文化への過度な同一化をすすめる大きな材料であった。アンリ・ベルグソンによる8月8日の非常に雄弁な陳述もその一つである。彼はフランス国家の内的統一を賛美し、「野蛮」に対する「文明」のための戦闘準備を命じた⁽¹⁶⁾。さらに英国のマスコミがドイツ人を「フン族」と定型化したこともその一例であろう。タイムズ紙もまた——それまではどちらかと言えばドイツびいきだったのだが——視覚化するのに適していたということも相俟ってとくにそのステレオタイプを好んで用いていた⁽¹⁷⁾。今日でさえもその影響力は保ち続けられているが、それとは対照的にドイツ人教授陣と彼らの反英国プロパガンダは同様の成功を取めることはできなかった。

しかしながら、このことは第一次世界大戦において「ドイツ理念史における特殊な道 (deutschen Sonderweg in der Ideengeschichte)」があったことを意味しない。このような考えはプロパガンダ戦争が国際的な出来事であったことを度外視している。当時は対立する議論に反論し自身の立場を宣伝することがとりわけ重要であった。また、「ドイツ理念史における特殊な道」という考えは「ドイツ的な性格」を賛美することを好んでいたが、逆にそうした考えそのものがそうした性格を損なっていた。そしてついにはそうした考えは経験的に実証することがほぼ不可能であるような大胆な連続性の思い込みを招くのである。彼らは時々「精神の戦争」と「1941 年以後の東の戦線におけるゲリラ戦争」との間の直接的な関係を示そうとする⁽¹⁸⁾。しかし第一次世界大戦における理念史でさえもそれ自身の前提において理解されるべきである。ドイツにおいてどれだけの人が実際に同盟国によるプロパガンダから学ぼうとしたかは、当時もっともよく読まれていた社会学者ヴェルナー・ゾンバルトから知ることができる。

III

1915 年の 2 月、『商人と英雄』において不親切な口調で語り出したのがヴェルナー・ゾンバルトであった。経済学者であり自己マーケティングにおいて天才的であったゾンバルトは、大戦について過熱したディベートが繰り返られる最中においては極端な単純化が唯一にしてもっとも効果的な武器であると知っていた。そのため、彼は英国人を勇敢なドイツ人によって身の程を知らされなければならない欲深い商人として描き、また、「戦争とスポーツの混乱」に対して激しく反論し、原子化した英国社会と社会的なドイツ共同体を対照的に描いたのであった⁽¹⁹⁾。

ゾンバルトの著作は主にイデオロギー的な再武装化の役割を担っていた。若いドイツ軍人らに「今後の将来におけるドイツの敵を見つける方向性」を示すというものであった⁽²⁰⁾。そこにおける敵の描写は過激なものであった。英国は世界を絞め殺そうとする巨大な蛸として描かれていた⁽²¹⁾。長い目で見たとき、英国の商人が快適な暮らしという理想を宣伝することには無理があった。人間の文化に対する純粋に功利主義的な理解は多くの人にとってはあまりに表面的なものとして受け取られる。未来はむしろ、より危険な人生に対して尻込みせず、また自分たちの仲間すなわち国民 (Volk) と深く結びついているような英雄の手中にあったのである。

今日までゾンバルトの著作はドイツアカデミック界における優越主義の典型としてみなされ続け、その成功はたびたび取り上げられてきた。偶然にも彼の無節操な憤りの表現に気分を害していた同僚らに対して最初にして最大の不満を抱いたのが「サロン・マルキスト」らであった。リベラル左派は確固たる英国びいきゆえに彼の偏見に満ちた例には傾かなかった⁽²²⁾。ただし、亡き兄を国民的英雄としてマーケティングすることに必死だった エリーザベト・フェルスター＝ニーチェのいるワイマールにおいては、ゾンバルトの考えや議論は多大な関心を引いた。英国の文明化の墮落はエリーザベト自身の策略と合致し、またニーチェの愛国心を押し進めるためのいい機会となった。何と言ってもゾンバルト自身彼女の兄を「ドイツ人民の最後の詩人および予言者」と呼び、また彼の軍事的態度を力強く強調したのであった⁽²³⁾。

しかしながらニーチェの思想の政治的利用に対する矛盾は強烈であった。第一に、これらは「喫茶店ライター (Cafehausliteraten)」と彼らの敵が呼ぶところの表現派の作家たちによるものであった。このことはニーチェの妹による「純粋なるドイツ人としてのニーチェ (Deutschsprechung Nietzsches) による占領」というものに反論したフランツ・プエムファートの論説において論証される⁽²⁴⁾。今日までのこのテキストは第一次世界大戦におけるニーチェ受容の変化を説明するために用いられてきた。しかし誇張表現は避けなければならない。エリーザベト・フェルスター＝ニーチェの決断はニーチェアーカイブの政治的方針にとって決定的であったかもしれないが、このことはこのような過激な考えがドイツアカデミック界の大多数においては受け入れがたいものであったという事実を隠蔽してはならない。

想像を超える数の戦争犠牲者を抱える中、結局のところすべては何らかの意味づけを見出すことに終始していた。歴史的な連続性を理解することができる人のみ、よりよい未来への道を知っているかのようであった。そのためぞんざいなコメントや無愛想な態度は従来歴史学者たちが言うほど要求されてはいなかった⁽²⁵⁾。また、われわれは人間が安定性を求める傾向を過小評価してはならない。とりわけ国家主義的な概念は、崩壊が目に見えていな

がらもそれを受け入れることのできない世界における永久性を保証しようとしていたのである。こうした背景において、イエナ出身のネオイデアリストであるルドルフ・オイケンのような「精神の戦争」における重要人物が登場した。この高尚で名誉ある人物の思索において ルター、カント、フィヒテがドイツ哲学の祖先として認められた。彼らの人間主義的な考えは抑制がきかなくなった近代よりもはるかに優位であると考えられたのである。この知的伝統の重要性から彼は戦争の結末がドイツに傾くと結論づけたのであった⁽²⁶⁾。

しかしながら、このことはオイケンのドイツ文化に対する高い評価が普遍的な共感はもとより西洋の国々においても共感を呼ぶことを意味しなかった。むしろ反対に、ドイツの知的伝統の英雄たちはひどく嫌悪されていた。特に軍隊への厳粛な責務の支持者とされていたカントや、思い上がりの予言者とみなされていたフィヒテは多くの場合は絶対的な拒絶の対象とされていた。例えばアメリカのプラグマティストであるジョン・デューイは、ドイツ観念論におけるひどく豪胆な自我哲学と同盟国の掲げる過剰な戦争の目標が密接に関連していると論じた⁽²⁷⁾。こうした彼の主張は言うまでもなく根拠がなく、真面目な学術的議論においては齒が立たないものであるが、こうした論説は「精神の戦争」においていかに様々な主張や非難が飛び交い、またいかに白熱した議論が繰り広げられていたかということを示すには十分である。ドイツアカデミアは自身の「善意志」を誤って信頼してしまったのである。プロパガンダ戦争という状況下では、カントの概念は自分たちの主張を実証するという目的か、あるいは政治的状况を曖昧にするためだけに用いられた。規範的な倫理における正当化原理としての「善意志」という考えは説得力を失った遺物と化し、遅くとも 1918 年には時代遅れのものとなっていた。

IV

終わりにいくつかの結論をまとめてみたい。「精神の戦争」に対するはっきりとした見解を維持するためには、われわれは大きな代償を払わなければならない。というのも、そこにおいてわれわれは——批判的ではあるが——国家主義的な主題を繰り返しているのであり、またそのことで——意図的ではないが——その存続に貢献しているのである。同時に、われわれは世界戦争文献の文脈的な性格を低く見積もっている。これらの文献は一見するとほかの解釈の余地のないことを述べているかもしれないが、それは表面上のことである。検閲を十分意識しながらも、また市民の停戦を第一の目的として掲げながらも、なお書き手たちは国内の政治を動かしたいと欲していた⁽²⁸⁾。これらの著作を正しく理解する前に、われわれはまずカモフラージュされたコメントやイデオロギー色のかかった表現を解読しなければならない。

私見では、世界戦争文献のよりよい理解のためには次の二つのことが重要である。第一に、われわれは曖昧さにより注意を払うべきである。例えば、ヒューストン・スチュアート・チェンバレンがもっともよく読まれたドイツプロパガンダライターであった（彼の本は 100 万部以上売れたのである）という事実の理由については広く知られてもいないし、また十分に説明されてもいない。たしかに皇室とのつながりや出版元であったミュンヘンのブルックマン出版社のプロフェッショナリズムは確実に彼に有利に働いた。しかし極めて重要な点は別のところにあった。リヒャルト・ワーグナーの義理の息子であるヒューストン・チェンバレンは、教養（Bildung）というプロテスタントの伝統を賛美していたオイケンよりも、また文化的な悲観主義で武装された英国攻撃に集中していたゾンバルトよりも、単純に読者に提供するものが多かったのである。チェンバレンは商品に対する英国精神について記述する際に 反ユダヤ主義色のかかった言語を用いていたが、検閲は問題なく切り抜けられながらもなお過激な右翼派には簡単に理解できるようにと工夫していた。と同時に、危機的な状況における自己完結した世界観に特徴的であるように、彼は堂々と自身の考える哲学史に矛盾するような事実をすべて度外視し、そのことによってその魅力を保持しようとした⁽²⁹⁾。

第二に、この過酷なプロパガンダ戦争における、散漫する力関係により注意を払うべきである。知識人らは最初の時点で粗い国家主義的な言動に頼っていたために後々身動きができなくなっていた。そのため、理念史の解明においても「大戦争」を形成していた「内在的なロジック」の分析が欠かせない⁽³⁰⁾。一例をあげると、「ドイツ軍国主義」への大胆な傾倒は破壊的なステレオタイプをあり、さらにはドイツの過去についての歪曲を手助けし、唆していた。こうしたことから、少なくとも国家主義的な偏見の扱いには十分気をつけなければならないことがわか

るだろう。そしてこのことは今日においてもなお言えることである。

* ここにおいて Anne C. Nagel 氏と Michael Seelig 氏にその建設的な批判と貴重なコメントをいただいたことに感謝申し上げる。またドイツ語原稿から英語へ微妙なニュアンスを捉えた翻訳を手がけてくれた Wolfram Kändler 氏にも感謝申し上げる。

注

- 1 Kurt Flasch, *Die geistige Mobilmachung. Die deutschen Intellektuellen und der Erste Weltkrieg*, Berlin 2000.
- 2 第一次世界大戦における「Deutschtumsmetaphysik」の多様なかたちについて掘り下げられた研究としてもっとも古いものについては以下参照。Hermann Lübbe, *Politische Philosophie in Deutschland. Studien zu ihrer Geschichte*, Basel/Stuttgart 1963, part 4. また、最新のものについては以下参照。Ulrich Sieg, *Geist und Gewalt. Deutsche Philosophen zwischen Kaiserreich und Nationalsozialismus*, München 2013, pp. 103-149.
- 3 Cf. Wolfgang Mommsen (ed.), *Kultur und Krieg. Die Rolle der Intellektuellen, Künstler und Schriftsteller im Ersten Weltkrieg*, München 1996. また、以下の事例研究も参照。Ulrich Sieg, *Jüdische Intellektuelle im Ersten Weltkrieg. Kriegserfahrungen, weltanschauliche Debatten und kulturelle Neuentwürfe*, 2nd ed. Berlin 2008.
- 4 このようなアプローチについては以下二つ参照。Steffen Bruendel, *Volksgemeinschaft oder Volksstaat. Die „Ideen von 1914“ und die Neuordnung Deutschlands im Ersten Weltkrieg*, Berlin 2003; Peter Hoeres, *Krieg der Philosophen. Die deutsche und die britische Philosophie im Ersten Weltkrieg*, Paderborn et al. 2004.
- 5 „Nur zweierlei ist möglich: entweder auswandern; oder deutsch werden. Dann aber: sich eingraben, einwurzeln mit aller Kraft, mit allen Adern, allen Muskeln, sich zum Deutschen erziehen, die Sache der Deutschen zu der eigenen machen“, in: Sprechsaal, *Deutschtum und Judentum*, *Der Kunstwart* of April 1st, p. 12. 引用は私が多大な恩恵を受けている次の秀逸な著作からである。Elisabeth Albanis, *German Jewish Identity from 1900 to the Aftermath of the First World War. A Comparative Study of Moritz Goldstein, Julius Bab and Ernst Lissauer*, Tübingen 2002.
- 6 “Wir wollen nicht lassen von unserem Haß / Wir haben alle nur einen Haß, / Wir lieben vereint, wir hassen vereint, / Wie haben alle nur einen Feind / England.” Ernst Lissauer, *Haßgesang gegen England*, in: Id., *Worte in die Zeit. Flugblätter 1914*, 1. Blatt, Göttingen 1914; 英訳は【邦訳者註：英訳は以下のものである。“We will never forego our hate,/ We have all but a single hate,/ We love as one, we hate as one,/ We have one foe and one alone-/England!”】1914年10月15日「ニューヨーク・タイムズ」に掲載された Barbara Henderson 氏によるものである。
- 7 “Das Gedicht fiel wie eine Bomber in ein Munitionsdepot”; Stefan Zweig, *Die Welt von Gestern. Erinnerungen eines Europäers*, München 1981, p. 286.
- 8 Cf. Elisabeth Albanis, *Ostracised for Loyalty: Ernst Lissauer’s Propaganda Writing and its Reception*, in: *Leo Baeck Institute Year Book* 43 (1998), pp. 195-224, here p. 196. 反英国の掛け声については以下参照。Jeffrey Verhey, *Der „Geist von 1914“ und die Erfindung der Volksgemeinschaft*, Hamburg 2000, pp. 204 et seq.
- 9 この一名は文学研究者のルードヴィヒ・ガイガーである。シーゲルのインタビューの背景については以下二つ参照。Sieg, *Jüdische Intellektuelle im Ersten Weltkrieg* op. cit., pp. 83 et seq.; David Brenner, *Marketing Identities. The Invention of Jewish Ethnicity in “Ost und West”*, Detroit 1998.
- 10 英訳に関しては以下に掲載されたものを参照。The North American Review vol. 210, no. 765 (August 1919), pp. 284-287 (<http://www.jstor.org/stable/25122278>, 27/06/2014). 原文については以下の模範的なドイツ語版参照。Jürgen and Wolfgang von Ungern-Sternberg, *Der Aufruf „An die Kulturwelt!“ Das Manifest der 93 und die Anfänge der Kriegspropaganda im Ersten Weltkrieg*, Stuttgart 1997, pp. 144 et seq. 以下の考察はこの研究によるところが大きい。
- 11 Fritz Fischer, *Der Griff nach der Weltmacht. Die Kriegspolitik des kaiserlichen Deutschland*, Deutschland 1961, p. 180. この誤解は「従属的な臣民の社会（“Untertanengesellschaft”）」たるプロイセンに対するフィッシャーの反感とよく合致していた。また後の版でも間違いは訂正されなかった。Cf. Bernhard vom Brocke, ‘Wissenschaft und Militarismus’. *Der Aufruf der 93 „An die Kulturwelt!“ und der Zusammenbruch der internationalen Gelehrtenrepublik im Ersten Weltkrieg*, in: William M. Calder III, Helmut Flashar and Theodor Lindken (eds.), *Wilamowitz nach 50 Jahren*, Darmstadt 1985, pp. 649-719, here pp. 655 et seq., note 7.
- 12 署名者の名前は以下であげられている。Ungern-Sternberg, *Aufruf an die Kulturwelt* op. cit., pp. 145-147.
- 13 このあたりを網羅する研究については以下参照。Margit Szöllösi-Janze, *Fritz Haber 1868-1934. Eine Biographie*, München 1998.

- 14 戦争時におけるアインシュタインの孤立については以下参照。Siegfried Grundmann, *Einsteins Akte. Einsteins Jahre in Deutschland aus der Sicht der deutschen Politik*, Berlin / Heidelberg 1998, pp. 39-80.
- 15 Ungern-Sternberg, *Aufruf an die Kulturwelt* op. cit., p. 145. 海外におけるマニフェストの受容については以下参照。Ibid., pp. 81-104.
- 16 Sieg, *Geist und Gewalt* op. cit., p. 109.
- 17 Cf. Georg Eckert, *Steife Oberlippe, hängende Unterlippe: Julikrise und Kriegsbeginn in der Londoner Times*, in: Id., Peter Geiss and Arne Karsten (eds.), *Die Presse in der Julikrise 1914. Die internationale Berichterstattung und der Weg in den Ersten Weltkrieg*, Münster 2014, pp. 113-135, here pp. 126-130.
- 18 Cf. Hans-Ulrich Wehler, *Deutsche Gesellschaftsgeschichte*, vol. 4: *Vom Beginn des Ersten Weltkriegs bis zur Gründung der beiden deutschen Staaten*, München 2003, p. 19. 私自身の見解については以下の二つの論考参照。“Deutsche Geschichte ist nicht tiefschwarz”, in: *Cicero*, October 2013, pp. 120-125; “Erkenntnis und Empathie”, in: *Rotary Magazin* 3/2014, pp. 48-51.
- 19 Werner Sombart, *Händler und Helden. Patriotische Besinnungen*, 11.-20. Tausend München / Leipzig 1915, p. 48.
- 20 Ibid, p. VI.
- 21 Ibid, p. 37.
- 22 この点はすでに以下で指摘されているが、ゾンバルトについてはやや単純化された考えが主流となっていたと思われる。Friedrich Lenger, *Werner Sombart als Propagandist eines deutschen Krieges*, in: Wolfgang J. Mommsen (ed.), *Kultur und Krieg. Die Rolle der Intellektuellen, Künstler und Schriftsteller im Ersten Weltkrieg*, München 1996, pp. 65-76.
- 23 Sombart, *Händler und Helden* op. cit., p. 53.
- 24 Franz Pfemfert, *Die Deutschsprechung Friedrich Nietzsches. Ein Protest*, in: *Die Aktion* 5 (1915), pp. 320-323. 歴史的な背景については以下参照。Steven E. Aschheim, *Nietzsche und die Deutschen. Karriere eines Kults*, Stuttgart, Weimar 1996, pp. 140-143.
- 25 そのような指摘をする最新の研究としては以下のものがある。ただし読む価値は十分にある。Ernst Piper, *Nacht über Europa. Kulturgeschichte des Ersten Weltkrieges*, Berlin 2013.
- 26 Cf. Sieg, *Geist und Gewalt* op. cit., pp. 117-122.
- 27 John Dewey, *German Philosophy and Politics*, New York 1915.
- 28 この点は以下の研究が明らかにしている。Bruendel, *Volksgemeinschaft oder Volksstaat* op. cit., とくに pp. 93-132.
- 29 Cf. Erik Lindner, *Houston Stewart Chamberlain: The Abwehrverein and the „Praeceptor Germaniae“, 1914-1918*, in: *Leo Baeck Institute Year Book* 37 (1992), pp. 213-236; Sieg, *Jüdische Intellektuelle im Ersten Weltkrieg* op. cit., pp. 183-187.
- 30 以下の見事な研究参照。Jörn Leonhard, *Büchse der Pandora, Geschichte des Ersten Weltkrieges*, München 2014, here p. 28.